

奥田太郎『倫理学という構え——応用倫理学原論』

ナカニシヤ出版 二〇一二年

神 崎 宣 次

評述べるにあたって読者にまず説明しておかなければならないことがある。二〇一二年一月二十三日に京都女子大学で開催された京都生命倫理研究会において本書の合評会が行われた。当日は品川哲彦氏、蔵田伸雄氏、上村崇氏に評者を加えた四名が各自の関心に基づいて本書についてのコメントと批判を述べ、それに対する著者からのリプライがあった後に、その他の参加者から質問が行われた。この書評には、このときの各氏のコメントやリプライを参考にしてある部分があることを断っておきたい。

本書の特徴は著者の主張が前面に出されているというメッセージ性にある。なかでも著者のメッセージが最も明確に表わされているのは次の箇所だろう。「……古来、倫理的な営みの核心には、次のような課題が存在し続けていたはずであるし、また、今後もそうであるべきと思われる。すなわち、目の前の

問題に対して、どのようにして自分の倫理学を作っていくのか。まさに、倫理学をつくる、ということこそが倫理学の核心なのである。」(p.187, 原文での著者による強調を落してある。)目の前の問題そして倫理学に取り組んでいくこのような態度を指し表わすキャッチフレーズが、本書のタイトルでもある「倫理学という構え」なのである。このメッセージは明確であり、倫理学は既存のテキストを生真面目に解釈しさえすればいいのではなく、もつと自由で面白い学問であるべきだという著者の別の主張(p.288等)と組み合わせたり、強いアピールをもって読者に語りかけてくる。本書に魅力があるとすれば、こういうところだろう。評者自身も本書のこうしたメッセージには魅力を感じずにはいられない。

しかし少し注意深く読めば、このような主張の明確さが見かけのものにすぎないという疑いを読者は感じるようになるだろう。評者が本書に感じる大きな疑問点の一つは次のようなもの

である。具体的な目の前の問題への実践的関心に基づいて各自が自分の倫理学をつくっていくことが重要だというのが中心的メッセージとなつていくにもかかわらず、本書では現代社会の一般的な諸問題が列挙されるだけで、著者自身の目の前にもあるはずの問題が具体例として語られることはない。これは非常に奇妙なことではないだろうか。倫理学をつくるという構えのお手本を著者は示そうとしていない。「実践」や「現場」や「政治性」といった具体性・問題指向性をほめかす用語がちりばめられ、実践的問題に無関心な倫理学者に対する筆者の罵り（まえがき¹³など）によつて駆動されているにもかかわらず、著者がこれまで、あるいは現在どのような問題にどのような態度で取り組んでいるのかは、本書を読んでも全くわからないのである。

実際、本書の議論の大部分は、著者自身の表現によれば「倫理学の哲学」あるいは「応用倫理学の哲学」(p. 9) とも呼ぶべき、「倫理学の研究を行うこととはどういうことか」という倫理学の形式についてのメタ・レベルでの議論となつている。そのため、キヤッチフレーズの前面に押し出されている著者のメッセージと本書の主要な内容とがずれてしまつており、そのことがモヤモヤした読後感を引き起す原因となつていようように思われる。たとえば第四章第二節では倫理学者は自らの営みの政治性を自覚し、引き受けるべきだと主張されているが、そこでの著者の議論は型通りのものに終始しており、著者自身の関

心は見えない。生命倫理学や環境正義からの話題も取り上げられてはいるが、話の表面をなぞっているだけで、著者自身がどう考え、そこにどのような問題と対処のための戦略を見ているのかを読者に示すための「事例」となるような、議論の掘り下げに欠けている。このように、本書の議論はどこか上滑りしており、「倫理学の核心」に触れたという感触を読者に与えるのに失敗しているように思われる。

直前二段落で述べた本書に対して評者が感じる不満点を一言で言い直せば、「メッセージは過剰だが、それを支えるための議論が過少」ということになるだろう。しかしこのような批判に対して、著者はそれは本書の欠陥ではなく、むしろ自覚的に採用している方法論の結果なのだと反論するかもしれない。その方法論とは具体的には「方法としてのエッセイは可能か」と題された第四章第三節で論じられている、学術論文と対比される哲学的思考のスタイルとしてのエッセイの思考である。この箇所では著者はエッセイという方法に言及する思想家として驚田清一やテオドル・アドルノ他数名の名前を挙げているが、ヒューム研究者でもある著者にとつてエッセイといえはヒュームであり、エッセイについての議論の最後のところでも (p. 240-241) 方法論として最終的に採用されているのもヒュームのエッセイについての思想である。

よく知られているとおり、ヒュームには「エッセイを書くことについて」と題されたエッセイがある。このエッセイでヒュ

ームは「学識者」と「会話好き」という二つのグループについて論じている。「学識者は、自由な時間と孤独の中で長い準備と厳しい労苦によつてのみ完成の域に達することのできる仕事を担っている。他方、会話好きは、社交的な気質や楽しみへの趣味をもち、緩やかに知性を用いて日常の事柄や世情に関する観察を行う人びとであり、学識者とは対照的に、孤独ではなく仲間との付き合いと会話を必要とする」というように両者を対比的に性格づけているだけでなく、このエッセイ執筆時より少し前の英国社会では両者の世界が分離されていたと認識し、その状況を改善する必要性をヒュームは説いているのである（本書 pp. 238-239）。

社会への関心を欠いた倫理学者という本書における著者の批判対象と、ヒュームの学識者とを重ね合そうという著者の意図は明らかだろう。学識者の世界と会話好きの世界との分断を改善するためにヒュームが提案している方法は、著者にとつては実践的な関心を伴つた倫理学のための方法論となるのである。

「非常に運良く始まつたこの学識者の世界と会話好きの世界との同盟が、相互の利益のためにさらになお一層改善されることが望まれる。そして、そのために、公衆を楽しませようと私が務めるこうしたエッセイほど有益なものはないと私は思う。こうした考えから、私は自分自身を学問の領国から会話の領国への一種の駐在事務官あるいは大使

とみなさずにはいられない。また、相互に依存し合う二つの領国間の緊密な連絡を促進することが、私の不断の義務だと考えている。」(p. 238) ただし、次の翻訳書からの孫引き。

田中敏宏訳『道徳・政治・文学論集』名古屋大学出版会 二〇一一年)

引用部の最後の文で述べられている内容は、現代において、また本書の文脈において、科学技術コミュニケーション等の場面における専門家集団と市民集団との間で専門家としての倫理学者がどのような役割を果せるかという問題に関連づけられるだろう。実際、著者はエッセイや政治性について論じている箇所に行先する第四章第一節においてこの問題を検討している。倫理学者の役割という問題は日本の倫理学研究者の間で一時期盛んに論じられたことがあり、本書でも検討されている品川による「コーディネーター説」などが提示されてきた。そうした諸見解のなかでも、本書第四章全体の議論の展開において重要な役割を果しているのが水谷雅彦による「専門的「蛇」説」である。ただし、本書にとつてこの説が担っている役割は、この説の「欠点」の批判を通じて、後の箇所でてくるエッセイの思想や政治性の自覚の必要性が示されるといふ、一種の踏み台としての役割であることに注意してもらいたい。問題は著者が水谷の説を理解できていない点にある。

蛇という比喩は、もちろん、著者も説明しているとおり「ソ

クラテスの弁明」において「ポリスという一匹の馬に、その目を覚まし続けるために付着する「虻」としての役割を自認するソクラテス」(p. 106)に由来する。そのような虻としての倫理学者の役割を水谷は次のように論じている。

「……そのような問題の解決にあたっては、テクノロジの「専門家」は、もはや閉鎖空間で独善的に事を決することはできず、そうしたテクノロジの影響を日常生活においてうける「素人」の存在を視野に入れ、それとの対話を心がけねばならなくなっている。「コディネーター説」は、そうした対話の場での「解釈者」、「通訳者」の役割を倫理学者に割り振ろうというものである。……しかし、「虻」になるということは、それ以上のこと、すなわち、テクノロジの「専門家」に対してと同様、「素人」に対しても、プロフェッショナルとして批判的に登場するということを含む。この意味では、倫理学者は「市民の代弁者」ではありえない。コディネーターということで、双方にとつてもわかりのいい通訳者が期待されるとするならば、この「虻」はそうした期待を多少とも裏切ることになるだろう。」(p. 200)次の論文からの孫引き。水谷雅彦「専門的「虻」としての倫理学者の可能性」『倫理学研究』第三一号 二〇〇一年 一三八—一三九頁)

このような虻説を著者は次のように批判する。

「……専門的「虻」としての倫理学者は、批判者の立場から「専門家」や「素人」に彼らの見解を批判的に反省させるために語るはずである。この時に語りかけているのは、やはり具体的個人としての「専門家」や「素人」の奥に想定された「理性的存在者」であり、語りかける以上は、その背後に「誰であれ、適切な知識と理解能力を身に付けられいずれわかる」という啓蒙的態度を合せもっているということになるだろう。」

これは専門的「語り」を方法とすることの必然的帰結であり、これを避けるためにはコディネーターとして振る舞うか、聴き手に徹するかしかない。したがって、倫理学者が専門的「虻」として積極的に語っていくためには、自らのうちにある啓蒙的態度に自覚的になりながら、「批判」の遂行を試みる他はないであろう。」(p. 201)

この引用部では「誰であれ、適切な知識と理解能力を身に付けられいずれわかる」という啓蒙的態度が、虻としての倫理学者が持っている態度だとされている。このとおりだとするならば、虻としての倫理学者は、素人の知識の欠如こそが専門家と素人の間のコミュニケーションを阻害する原因であり、啓蒙と教育によってこの阻害要因は除去されうるというコミュニケーション観に従って、倫理学者としてふるまっていることになるだろう。だが著者は、虻が素人だけでなく、専門家の期待をも裏切

ることになるだろうという、水谷が虻という比喩に込めた否定の契機を完全に見落してしまっている。それこそが要点なのだ。そもそもソクラテスの対話の終着点はアポリアであった。

もちろん対話篇の最終部で対話者があらためて対話を仕切り直すことを請い、ソクラテスが承諾することもあるが、このことは将来「いずれわかる」日が来ることを保証するものではない。虻は「啓蒙的態度」とは対極の態度を指す比喩なのである（評者の問い合わせに対して水谷氏が示唆してくれたように、ここで著者はまた別の意味で啓蒙という言葉を使っている可能性はあるかもしれない。しかしながら、そうであるならば、著者は自分がどういう意味でその言葉を使っているかを説明すべきであつただろう）。

著者の意図を汲み取れば、〈厳密な論理一貫性と構造を持つ論文、自らの政治性の自覚を欠いた啓蒙的態度、実践的関心から切り離された〉という三つ組で表わされる従来のアカデミックな倫理学あるいは哲学の方法論と対比されるものとして、〈散文としてのエッセイ、政治性の自覚に基づく批判、実践的関心に基づく〉という別の三つ組で表わされるような、新たな倫理学の方法論を提示しようというのが第四章における著者の試みであつただろう。評者としてもその心意は評価したい。しかしながら既に説明したように、エッセイという方法や政治性の自覚の必要性を示すための議論構成上の踏み台となるはずだった水谷の議論への理解と批判が誤っているために、エッセイや政治性についての議論に著者はそもそも辿り着けていない

のである。そのため、「本章全体を通じて明らかにしたこと、名宛人への姿勢と、政治性への自覚の有無とが連動しており、非方法の方法としてのエッセイの思想こそが、それらを媒介するということである」という一文(56頁)に納得する注意深い読者はいないだろう。また、エッセイという方法自体についても、先に挙げた引用でヒュームが述べていること以上に踏み込んだ検討がなされておらず、そのお手本も示されていないので、著者が具体的にはどういうスタイルや文体を念頭に置いているのかわからず、読者としては途方に暮れるしかないのである。

本書に対する否定的な評価がここまでの大部分を占めてしまつたが、もちろん、本書にも評価すべき部分はいろいろある。実証的心理学・行動科学の発展が倫理学に対して持ちうる含意に関しては近年さまざまな議論がなされているが、フランシス・カムによる義務論的アプローチを扱った第三章第四節は、この議論の新しい展開の紹介として読む価値がある。その直前の節も、関連する実証的心理学・行動科学についての簡潔な説明となっており、その分野になじみの薄い読者は参考にするこゝとができるだろう。その他にも第二章の第三節と第四節は、原則主義、決疑論、行為者中心主義といった倫理学上の方法論が歴史的経緯も含めて検討されており、多くの読者にとって参考になるだろう。